愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第50巻　第１号　13～24　2003

メンバーにおけるマジックマッシュルームの広がり

―― ドラッグユーザーのフィールドワーク（１）――

白　松　　賢
（教育学研究室）

（平成15年５月22日受理）

The “Using Process” of a Group of Magic Mushroom Users

Satoshi SHIRAMATSU

１．問題設定

本稿は「若者たちはどのようにドラッグを楽しんでいるのか？」という問いからスタートしてメンバーにおけるマジックマッシュルームの広がりを記述しようという試みである。まず誤解のないように書かなければならないが，この問いは「ドラッグは楽しいものである」ということを言及したいのではないということである。

近年，教育社会学の研究領域において社会問題として言及される（言及されうる）生活者の日常生活におけるディスコースへの関心から，フィールドワークの成果があいついで報告されている。例えば，①生活者のディスコースにおける問題の定義，あるいは定義されていくプロセスを対象とした研究（内田 2001，内田 2002）や②生活者のディスコースとマクロレベルのクレイムのアーティキュレーションを対象とした研究（山田 2002）などがある。これらの研究の背景には教育社会学の研究領域が「積極的に現代社会に隠された問題を指摘し，その解決を志向する」（酒井 2000　68頁）責務を有しており，もちろん筆者のフィールドワークの主題もこの方向にあることには違いがない(1)。

またフィールドワーク（そして最終的に報告される民族誌（エスノグラフィー））の妥当性を高めるためには，生活者のトークを丹念に観察・記述し，彼ら／彼女らの日常生活の中から，彼ら／彼女らへの問いを見いださねばならない。例えば，「なぜ山に登るのか」という登山家への問いに対する「そこに山があるから」という回答に見られるように，インタビュアーは話し出せば気の遠くなるような話をいともたやすく一言で尋ねたり，強引にまとめたりする。その結果，「現場の人々の無数の声をフィールドワーカー自身の声で－しばしばかなり強引な形で－まとめてできあがる調査報告書の刊行を持って終わりということ」（佐藤 1999　ii 頁）にもなる。このフィールドワークの問題から，「なぜ危険なドラッグをするのか」という問いをたてることは，む

しろ彼ら／彼女らの日常世界への参入やそこで得られる声を大きくねじ曲げる障壁にもなりかねない。そこで彼ら／彼女らの日常世界の中で発見される問いから，物語を記述していく必要があり，先の冒頭の問いがフィールドワークの中で第一に生じた問いであったためである。

そこで本稿は，マジックマッシュルームを使用する（現在においては使用していた）仲間集団へのフィールドワークを通して「どのように楽しんでいるのか？」という問いの中で，彼ら／彼女らのマジックマッシュルーム使用のプロセスに着目する。その上で，どのようにメンバーが使用をはじめたり，どのようにメンバーの中へ広がっていったのか，を明らかにしたい。

２．分析フレームの再構成　－マジックマッシュルームへの着目－

本稿でマジックマッシュルーム使用者に着目した理由は，まず地方若者文化に関してあるサークルのフィールドワークを行っていた時期（1998年６月より2000年３月）に，あるメンバーが使用を開始したことを知った（1999年12月）という偶発的な要因によっている。

マジックマッシュルームと呼ばれる幻覚キノコは，近年流行した脱法ドラッグの一つでである[(2)]。マジックマッシュルームは幻覚を引き起こす種類のキノコの総称であり，約20種類のキノコには精神作用に影響を及ぼす成分であるシロシビン（psylocybin）及びシロシン（psylocin）が含まれている。シロシビンやシロシンは麻薬成分の一つに指定されているため，抽出すると「麻薬及び向精神薬取締法」に問われるが，自然物を観賞用として販売する場合（一般に売買されていたのは観賞用の乾燥キノコ，時として生の状態）は法律の対象外であった。そのため自然物自体も麻薬原料植物に指定する政令改正（2002年６月６日）以前には，法的規制を受けない脱法ドラッグ，使用者の間では合法ドラッグとして知られていた。

しかしながら政令改正以前にも，マジックマッシュルームの危険性を違法なドラッグに同定する規制言説がパブリックな領域で生成・展開しつつあった。例えば朝日新聞は「幻覚キノコ危うい増殖」というタイトルで，1998年頃より20代の若者を中心に使用者が増加していると推測し，キノコ粉末を飲んだ男性がビルから転落死したケースや成分には違法なシロシンやシロシビンが含まれていることをとりあげている（1999年７月18日付け記事）。また2001年４月には「マジックマッシュルームを食べた」ために病院に運ばれたと俳優の伊藤英明に関する報道がなされている（2001年４月11日付け朝日新聞記事，2001年４月11日付け毎日新聞記事）。すなわち，「マジックマッシュルームの使用」は法律には違反していないながらも，違法なドラッグと同定される言説もあったことから，マジックマッシュルーム使用は「もし他人に発見されれば，社会的反作用を招来する蓋然性の高い行動」（宝月 1990　45頁）という逸脱の「感受概念」を適用しうる行為であった。この「感受概念」によりドラッグユーザーの研究の一つの領域として，脱法（＝合法）ドラッグの研究に意義を見いだすことができると考えたため，地方若者文化のフィールドワークから，マジックマッシュルームへ着目したフィールドワークへ枠組みを変更した[(3)]。

３．調査の時期と対象

調査は1998年６月から2002年８月にかけてのメンバーへのフィールドワークとともにメンバーの集まりが減少していった2000年４月以降は，それに加え，一人ひとりに対する個別の自由

面接法による調査を行った。分析では主として1999年９月のマッシュ使用から，2002年２月までの彼ら／彼女の使用を対象とするフィールドノーツ（メモ，フィールド日誌を含む）と自由面接法によって得られたインタビューデータである(4)。また，本稿で対象としている主要なメンバーは，以下の通りである。なお本稿で用いるメンバーというタームは，コージロウによって「俺ら」と語られる範囲の友人を示している(5)。

＜サークルのメンバー：年齢や学年は1998年６月調査開始時を記載している＞

コージロウ：当時大学３年生（21歳）であり，サークルの部長であった（1998年６月）。コージロウはサークルの中ではイベントの企画やまとめ役になることが多く，新しい音楽やhiphop 系の情報を入手したり，新しい企画をサークルに提供する役割を担っていることが多かった。2000年３月大学卒業後は，ショップ等を経営する10名以下の会社へ就職し現在に至る。1999年秋から2002年６月までマッシュ（マジックマッシュルームを以下ではメンバーの使用する「マッシュ」と表記する）を使用していた。その間，他のメンバーへマッシュの紹介をしたり，入手経路となっていた。本稿のキー・インフォーマントであり，マッティの卒業後はもっとも近い関係となった。

ユージ：当時大学３年生（20歳）であり，「キャッキャ，キャッキャッしてるだけの俺」（1999年10月フィールドノーツ）と自分を定義するように，サークルのメンバーの集まっている場面では最も発話が多く，その内容の多くはみんなを笑わせるような冗談やツッコミであった。大学卒業後はデザイン系の会社へ就職し，現在に至る。1999年秋から2002年６月までマッシュを使用。

マッティ：当時大学４年生（21歳）であった。フィールドワークの初期はもっとも筆者に近い関係であり，彼がフィールドへの参与を助けてくれた。1999年３月大学卒業後は１年間の就職浪人のあと公務員となり，現在に至る。1999年秋から2002年６月までマッシュを使用。コージロウとは関わりなく，マッシュを使用するようになった。ほとんどは一人での使用であり，コージロウらと使用したのは２回だけである。

ミキ：当時大学４年生（21歳）であり，コージロウの彼女であった。1999年３月に卒業後，地元に戻り就職していたが仕事をやめ，その後，コージロウの住む地域でフリーターとなる。1999年秋から2002年春までマッシュを使用。

＜2000年４月以降に筆者の出会ったメンバーたち＞

ヒロキ：2000年８月末にコージロウとともにいたヒロキに出会う。大学時代にバイト先が同じで仲良くなったという。1999年秋から2001年秋までマッシュを使用。

マツ：2001年９月にコージロウと一緒にいる時に出会う。2001年春にコージロウとマツは出会っており，４月以降仕事の関係でコージロウと仲良くなる。2001年の冬から2002年の春までマッシュを使用。

４．メンバーへの広がり

４－１．「おもろい」「いいもん」というマッシュ

コージロウらのマッシュ使用は，1999年の秋頃（コージロウ，ユージ，マッティ：ミキとヒロキは1999年冬頃：マツは2001年冬）に始まったという。コージロウとユージが連れだって私の研究室を訪れた1999年12月初旬に，彼らのマッシュ使用について初めて耳にした。さらにマッティの使用も2000年１月初旬に知った(6)。

＜コージロウとユージ＞

彼らの就職，サークルのことなどについて，一通り話終えた時だった。コーヒーを机におきながらコージロウが「そうそう，最近，おもろいもんみつけたんすよ」と切りだした。（その前に会った10月の大学祭でコージロウと一緒に歩いていた時に「そういえば，最近おもろいもの見つけたんすよ」と語り始めたことがあったがちょうどその時，後輩のワカコたちからコージロウが呼び出されたためにそのまま聞くことなく忘れていた。それを私は瞬時に思い出した)。「それって前も言ってたよね。なんなの？」と尋ねると一瞬二人は顔を見あわせてニヤニヤしながら，コージロウが「マジックマッシュルームって知ってます？…○○っちゃん，知ってるかもしれんけど」と聞いてきた。いくつかの国において法的に規制されているドラッグであり，日本でも法的に規制されていると思っていた私はかなり驚いたため，「知ってるけど，それ，ヤバイんちゃうの？」と大きな声で反応してしまった。その私を見た人は笑いながら，得意げな顔でユージが「いや，それが大丈夫なんすよ。」と少し大きめの声でゆっくりと種明かしをするように言った。しかし違法なドラッグと同定していた私は不安や心配をそのまま表し，彼らの発言を否定するように「いやヤバイだろう」と言った。すると「日本では捕まらないんすよ。合法っす」とコージロウは笑いながら言うが，私は「本当に？」と確信できずに問い返していた。しかしながら同時に，私自信がその法的規制についてよく知らないことにも気づき，きっぱりと「捕まらないんすよ」と言い切る彼らの態度から，「そうなのかな」と思いながら聞きはじめていた。「なんかの成分を抽出すると，いかんらしいんですけど，そのものは大丈夫らしいんですよ」とマッシュに関する法律上の問題について語っているコージロウに「どんな感じなん？」と尋ねると彼らは「おもろいっすよ」（コージロウ）「かなり遊べるっすよ」（ユージ）と言う。法的規制の問題については彼らの言う通りなのかもしれないと思いつつも，身体や精神的な影響が心配になってきた私は「でも気をつけろよ」といったが，彼らは笑って「大丈夫っすよ」と答えていた。

（1999年12月フィールドノーツ）

＜マッティ＞

ファミレスをでた後，駐車場で私たちはいったん解散することになった。飲み会に出ない私はマッティに駅まで車で送ってもらうことになった。まだ電車の時間まで間があった私はマッティと車の前で彼の近況について話していた。飲み会まで友人のところに行くというコージロウらが先にでていったのを見送った時だった。マッティは「実はいいもん持ってきました」といいながら，助手席のドアを開け，車のダッシュボードの中からタバコ入れのよう

な缶をだした。さらにその中から白っぽいものが入った小さなビニール袋を取り出して，「マジックマッシュ（ルーム）です」と私に手渡した。

マッシュの入ったビニールを手にとってみると，しめじを細く長くした形のキノコを乾燥させたものだった。ところどころくたびれた感じに曲がり，全体的に白っぽい色（薄く茶色がかった部分もある）で，よく見るとところどころにうっすら青いシミのような小さな点があった。それが４－５本入っていた。マッシュの入った袋を彼にゆっくり返しながら，「これがそうなんだ」と尋ねた。彼は「○○っちゃん，知ってました？」と聞くので，「さっき，マッシュの話をコージロウとユージに少し聞いてたんだけどね」と答えた。その少し前，ファミレスで話していた時，コージロウとユージにマッシュのことを少しだけ聞いていたが，コージロウやユージは小さい声で話したり，他のメンバーの使用について何も言ってなかったので，私は先ほど集まっていた他のメンバーはコージロウらの使用を知らず，マッシュ使用をしていないと思っていた。しかしマッティは「あ，そうなんすか」と淡々と答えるだけで，コージロウやユージとしていたマッシュに関する会話は，別のテーブルで後輩と話し込んでいたマッティの耳には入ってなかったようだった。　（2000年１月フィールドノーツ）

彼らが「おもろいもん」「いいもん」を見つけたと私にマッシュの存在を話した1999年12月から2000年１月の少し前に，イベント（1999年の秋の終わり）で，コージロウらとマッティはお互いの使用を知ったという。コージロウは「やっぱ，一番自分が気のおける（「気のおけない」の誤り），安心した仲間がやってて，自分なりに考えて結論出してオッケーだしてたから，すごい嬉しかった」という（2002/8/12インタビュー）。この再会で，発見の喜び，感覚の共有や安心感を得て，マッシュのおもろさを強く感じている。

この「おもろいもん」「いいもん」というメンバーの言い回しには，違法なドラッグと同じ程度の薬理効果があり，かつ違法なドラッグではない，という二重の意識が潜んでいる。「おもろいっすよ」「かなり遊べるっすよ」という感覚は，後のインタビューにおいてもしばしば語られる。

コージロウ：「食って。おっ，こらすげぇ」（2001/2/3インタビュー）
ユージ：「そん時は，そうとう，ああ，そうとう遊べた時っすね」（2001/7/3インタビュー）
マッティ：「あの頃はとにかく強烈に来たから」（2002/9/9インタビュー）

彼ら／彼女らによると，30分から１時間ぐらいで「衝撃がすごい」「ドンギマリ」（コージロウ，ユージ），「ガツンともう自分でキマったのが自覚できるだけのトリップ」（マッティ）と表現される視覚的な変容と忘我状態を体験している。彼ら／彼女によるとキマリ始めるまでに食べてから30分から１時間かかり，そして「ドンギマリ」の状態がキマリ始めてから２時間くらい，それから１時間から２時間くらい「まったりして」「気付いたら」「終わったかなー」という感覚で終わっていくという。彼ら／彼女らは，３時間から５時間の効果を体験したという。

その感覚について例えばジローは「集中力が高まる」といい，マッティは，「床が溶けるんすよ」（2000年１月フィールドノーツ）と視覚的な変容を具体的に語っていた。後のインタビューで「最初の印象ってすごかった？」と尋ねた質問に対して，以下のように語った。

コージロウ：（最初の体験について）「いやあ。しゅ，とりあえず集中力が高まるって感じかな。色とかはすごい綺麗やし。音に関しては全然なんですよ。普通なんですよ。（筆者：うん，映像？）映像... はすごいですね。（中略）だからよく幻覚見えたっていうけど。絶対。何かが人の形に見えたっていうだけで，無から有は絶対にないから。」

（2001/2/3インタビュー）

マッティ：ぐにゃぐにゃーって感じですね。ぐにゃぐにゃ溶けてくーって感じですごかったっすね。（中略）一応一通り自分の納得行くまでどういうものがトリップの内容かなんかは一応調べてたから大体予想はついた通りだったんで，あと自分の安心できる空間ていう所でやったのがあるから，全然恐怖はなかったです。（最初は自分の部屋？）自分の部屋です。（中略）あと外でやればいいかなと思って屋上にあがりました，階段上って。景色はまあ綺麗なんすけどやっぱし細かいところに目がいっちゃうんですよ，その時は一番すごかったのが，床のコンクリートが固いはずなのにダラダラダラダラ溶けて流れてくるんすよ，おかしいおかしいじーっと見ても流れてくる，手で触ったら固いんすよね。これがこの幻覚かなっていうのがそこで初めて分かって。あと後半はもうインナートリップです。ずーっと，タイタニックのサントラかけながらこう大学ん時の友達とか懐かしいなあ思いながらこう。哀愁に浸ってました。（インナー系で？）ええ，で，４時間ぐらいしたらもう効き目がなくなってきたんでそれで帰ってきたっていう感じです。

（2002/9/9インタビュー）

初期には，こういった視覚的な変容を体験できるドラッグとして彼ら／彼女らのライフスタイルへ組み込まれていく。この時期，「僕らがやってもうたのは，最初はやっぱ，ハマる。こんなもんがっていうぐらい衝撃がすごいからあ。」（コージロウ：2001/2/3インタビュー），「週２とか」（ユージ：2002/7/13インタビュー）と後で回想するように，かなりの頻度で行っていたという。

４－２．使用上の注意の確立

コージロウは，マッティとの再会からマッシュ使用の安全性を強く確信し，より楽しめる方法を求めて，1999年秋から2000年春までの時期に，マッティの育てたマッシュを含め，手に入る様々なマッシュ，大別して「ハワイアン」（１種類）や「メキシカン」（３種類）をユージらと共に試している。

さらにコージロウらはマッシュの種類を試してみるだけでなく，「映画館」「デパート」「屋上」「スノボ」等，様々な場所における使用も試している。どのような状況がもっとも楽しめるか。またどの種類がよいか。どの程度の分量を食べるのがよいか。入手先，ネット，本や雑誌からの情報と自らの経験を照らし合わせながら，コージロウらにとって最も安全でよい効果の得られる方法を探している。

この実験的使用 experimenting(7) の背後には，マッシュが必ずしも同じ効き方をしないことや，プラスの感覚だけではないという体験がある。マッシュはマイナスの感覚をもたらすこともあり，マッシュの安全性に対する認識を揺るがすアクシデントが時折彼らの使用時に生じている。

ファミレスで飲み会までの時間を潰す間，私はコージロウとユージにマッシュの話を聞いていた。その時，「そういえば，この前やった時，ユージはずっと泣いてるんですよ。」とコージロウがユージをちゃかし始めた。「あん時は，マジ悲しかった。」「何が？」何が悲しかったかわからんっすけど，ずうっと泣いてたらしいんすよ。」というユージの体験から，マッシュの薬物効果には精神的な影響が強いことを知り，自分の心理状態とセッティングの大切さを感じたという。また時折，いつもと違うキマリ方をした時もあったという。「そういえばマックが前やった時，食べてから５時間くらいしてきたって言ってなかった？俺達が終わりかけてる時に，き始めたって」というコージロウに「満腹の時に食べたからだろう。本人も満腹だったからかなあって言ってたし。」とユージはその原因を解釈し，その後お互いその解釈を確認している。（2000年１月フィールドノーツ）

こういったアクシデントが起こった場合，その生じた時の使用者の状況を分析し，お互いに危険性やその危険性を回避する方法を確認しあう。このようにしてアクシデントを教材として，コージロウらはマッシュの使用上の注意を確立していった。この使用上の注意を確立していく1999年秋から2000年春までの時期は，様々な経験を重ねながら学習する実験的使用 experimenting の期間であった。そして彼ら／彼女らの使用では，その注意事項を守っている限り，安全なドラッグ＝「遊び」として彼ら／彼女らのライフスタイルへ位置づいていった(8)。

４－３．友人への広がり

またこの実験的使用の期間である1999年の秋から冬にかけて，コージロウは多くの友人に紹介している。それは「おもろいもんを見つけた」という感覚においてであった。以下はコージロウにマッシュを紹介された時について尋ねた時のメンバーの回答である。

ユージ：キムチ鍋パーティーをした後に，（コージロウが）あるぞ，ということで。
（2001/7/3インタビュー）

ヒロキ：怖さは，実際，そうはなかったですね。ちょっと興味本位っていうのはあったんですけど。（中略）ほんでまあ，それ以前に，する前にいろいろ，勉強させてもらったっていうか，知識をつけて，つけさせてもらった。どういう効果があるかって，それはコージロウから。これはこうなるもんやからって。で，あんまり関心ももたんし。話を聞いて，すごいいい，セッティングをしてくれたんで，だから全然大丈夫やったんすけど。
（2001/9/11インタビュー）

ミキ：ご，合法？いわゆる違法なものではない，ので，ね。ま，あの彼の部屋だし，彼と一緒やし，そんなに，一気に量を食べるわけでもないし，ま大丈夫かなと。（筆者：ふーん，誰に聞いて？）。それは彼（コージロウ）ですね。もう，彼以外からは，そういうことは全然なので。（2001/10/21インタビュー）

ユージはコージロウから紹介された時にすぐに面白そう，と使用を共にしている。しかしな

がら，ヒロキやミキはある程度説明を受けてから使用し，ミキはマッシュを「ドラッグ」カテゴリーに同定し，とまどいを感じつつも法的な問題がないことを知り，使用を行っている。すなわち彼ら／彼女らにとって逸脱は法的なサンクションをうけるかうけないかということによって決定される定義であった。そのため合法のマッシュは，遊びに定義づけられていく。

さらにマッシュのメンバーへの広がりには，ドラッグに対するとまどいを持つ／持たないではなくて，「誰に紹介されたか」ということが重要な意味を持っていた。宝月（1990，229頁）の指摘するように「近親者や社会の中心的位置を占める人の行為は，たとえ逸脱とみなされるものであっても，しばしば正常化されたり，楽観視されたり，中和化される」。メンバーの中心的存在であったコージロウへの信頼は，そのまま彼のマッシュ使用への信頼につながっていた。ただしコージロウは友人の全てに紹介しているわけではない。むしろ興味を持ちそうな友人であったり，一緒に楽しみたい友人にしか紹介しない。

俺が食ってみて，めちゃめちゃおもろかったから，人にも教えてやって
（コージロウ：2001/2/3インタビュー）

普通に家に呼んでもいい友達っているじゃないですか。（そういう友達には）それをどんどん教えてやるけど。家に遊びに行ったりするほどでもないやつにはわざわざ，教えて気ぃ遣うのも，めんどくさい。宣教師じゃないっすから（笑）。
（コージロウ：2001/10/21インタビュー）

このように1999年秋から2000年にかけて，すでに親しい友人であったユージ，ヒロキやミキには「おもろい」遊びを共有したくて紹介し，ともに楽しい環境をつくってマッシュを楽しむようになった。しかしながらそういったメンバーからマッシュが他に広がっていくことは少ない。というのも，ほとんどのメンバーの入手経路がコージロウであり，一緒に行っているためである。ただし，ユージは2002年３月から規制されるまで，彼女とともに「３，４回ぐらい」使用しており（2002/7/13インタビュー），マツは「１度」他の友人としたという（2002/9/7インタビュー）。また他のエリアで自ら入手し，使用していたマッティは，地元の友人数人に紹介しているものの，あまり信頼できる友人がいなかったので，ほとんど一人で使用していたという。

またサークルや大学時代の友人とは異なり，仕事の関係で知り合ったマツは2001年３月にコージロウと出会ってから2001年12月になるまで半年以上，彼のマッシュ使用に関しては知らなかった。

マツ：やっぱり，情報がメディアからしか入ってこないんで，メディアはやっぱり悪いって決めつけて言ってるんで。僕自身もやったことはないんですけど，その悪いっていうイメージを。ただ，やるに関して，紹介された人（コージロウ）を信頼してたから，やってみようかなと思いました。（中略）。（その時までコージロウが）やってるっていうのも知らなかったんですけど，何がきっかけなんでしょうね。えっと，とりあえず，こういう楽しいことがあって，これは合法なんだっていう。ちゃんとした説明を受けて。僕自身，彼自身，実際自分が体験して大丈夫やから勧めるって，一人でやるんじゃなく，初め一人じゃ

なくみんなでやる方が安心だから先輩三人と僕でやったんですよ。だから気分的に楽だったんですよ。（筆者：それはやらしたんではなく？）あ，それは自分からですね。はい。こういう楽しみ方があるんだっていうのを…（筆者：聞いて？），自分からやりますって。（筆者：そういう話をして？）そうですね。何事も経験なんで（笑）。でも自分の中では，ケミカルとかは絶対やらないっていうのはありますけど。たばこも吸わないですからね，僕は。（2002/9/7インタビュー）

マツはコージロウと過ごしているうちにたまたま使用する機会があり，それ以来，２回使用した。半年以上のつきあいの中で構築したコージロウへの信頼が，彼の使用するマッシュへの信頼へつながっている。また先に語っているようにミキはコージロウとしか，マッシュの話をしないというように，マッシュの使用についてメンバー以外とはあまり話さない。マツは，紹介したり，話をする友人の選択について以下のように語る。

（他の友達とかにはそういうことを話したりする？）そうですね。やっぱり人を選びますよね。それはどうしても。うーん。（その選ぶ基準は？）すごく難しいですよね。その質問は。なんか感覚的なものですよね。あっこいつだったら大丈夫かなって。だから大学の友達とかにはいっさい言ってないですし。（わかってくれる人は？）だいたいわかりますし，やってもその変なことしないっていうか，一緒に楽しめるなっていうのはあるし。ある程度の距離感は，距離感っていうか，親密具合は大切ですよね。知らない人にいきなり言うっていうのはないです。（2002/9/7インタビュー）

以上，友人への紹介において，親密さや感覚の共有が重要なファクターになっており，さらに「一緒に楽しめる」を基準に，偶発的な要素（たまたまその機会があったかどうか）により彼ら／彼女らのメンバーへ広がっていったことが明らかとなった。

５．まとめと課題

本稿では，以下のことが明らかになった。

まず彼ら／彼女らにとってマジックマッシュルーム使用は，社会問題のクレイムにおいて語られる「危険な逸脱行為」ではないということである。彼ら／彼女らにとっての逸脱は，法規範を犯した行為に対して定義されるものである。さらにメンバーは，「使用上の注意」を確立し，遵守することで，危険なドラッグとして定義されうるアクシデントを未然に防ぎ，マッシュ使用をより楽しめるように，あるいは単に楽しいものと認識していったのである。すなわちこの使用のプロセスから，当時法律で規制できなかったマジックマッシュルームは，メンバーにおいて「遊び」というリアリティとして定義されてきたことが明らかになった。

また限定的にメンバーへ広がったプロセスが明らかになった。メンバーは全ての友人にマッシュを紹介するのではなく，「ともに楽しめる」友人のみに限定していた。これは野球をすることが好きだからといって友人の全てと野球をするかという問題である。すなわちマッシュを共に楽しめる友人と時にはマッシュをするし，しない時もある。さらにマッシュをしない友人とはまた別のつきあいをするという彼ら／彼女らの日常生活における友人との「遊び」のスタ

イルを示していると考えられよう。そのためメンバーへの広がりは，「遊び」としてのマッシュ使用を定義をしていくプロセスとともに，「遊び」を共有できる人間関係の取捨選択と，その機会の有無という偶発的な要素によって生じていた。

こういった彼ら／彼女らの行為に対して，例えば（1）危険性に対する認識が不足している，（2）たまたま大丈夫だったにすぎない，というクレイムを申し立てることは可能であろう。しかしながら彼ら／彼女らはドラッグに対する規制言説を知らないのではなく，知った上で行っており，彼ら／彼女らのディスコースは，Pollner 1987や草柳 1994，1998らの指摘する「リアリティ分離」を示しているということである。現在，「ドラッグに対する若者達の無知が興味・関心を生みだしている」という考え方を前提として，薬物乱用防止教育や啓発活動では「ドラッグの怖ろしさ」を身体的・精神的・社会的危険性の観点で強調するアプローチがとられている。しかしながら本稿の知見は，こういったアプローチに対して再考を迫る結果であり，ドラッグに対して「危険な逸脱行為」というリアリティを定義する側と「ある注意をすれば安全で楽しい遊び」というリアリティを定義する側のディスコースにおける「リアリティ分離」に今後どのように取り組んでいくのか，というさらなる課題を示している。すなわち「危険な逸脱行為」というリアリティ定義（による＜語り＞）は，逆に使用した場合に危険という認識を持たないならば，むしろ「安全」を認識させる可能性も同時に秘めているということである。すなわち我々は，薬物乱用防止教育や啓発活動における＜語り＞のパラドックスを再度認識し，新たな教育や啓発活動の方向性を模索する必要もあるのではないだろうか。

最後に今後の課題を示しておきたい。本稿ではメンバーの日常生活から問いを見いだし，彼ら／彼女らの使用に関するディスコースやプロセスを記述してきた。その上である一定の「リアリティ分離」の実態が明らかになってきたことに，フィールドワークの意義が見いだせるであろう。しかしながら，メンバーのディスコースを客体化することで，調査者である筆者のディスコースへの影響を十分検討していないという問題もある。むしろこの「リアリティ分離」は，調査者である筆者とマジックマッシュルーム使用者たちとのディスコースにおいて立ち現れてきた問題であり，今後は調査者と彼ら／彼女らとのディスコースを客体化し，分析を深める必要があることを付記して，稿を閉じることとする。

註

（1）フィールドワークにおいては，解決を志向するということに関してできうる限り禁欲的に取り組んだ．それはフィールドワークが問題を解決するというスタンスに立脚することは極度に危険性をもはらんでいると考えたためである．というのもフィールドワーカーはともすれば観察し参与しているメンバーたちに「外部の意味づけを押しつけ」，実際には起こり得なかったことをさもおこったように書いてしまうことさえある（Emerson ら訳書237－243頁）．筆者はフィールドワークにおいて彼ら／彼女らが何に関心をもち，どのような生活を送っているかに主眼をおき，同時に筆者とメンバーの関係を自省的に分析することでそこに潜む問題を考えるという立場に立脚してフィールドワークを行った．フィールドワークがどのように解決に関わるか，という点については「結果として関わりうる」という観点で他稿で論じたいが，本稿ではまず「隠れている問題を指摘する」という点においてフィールドワークの意義を見いだしている．

（2）マジックマッシュルームに関する情報は，財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター『Drug Education Manual 薬物乱用防止教育指導者読本』（44頁）と，警察庁2002『Drug 2002』（けいさつのまど NO. 128《特集号》：7頁）による．

（3）フィールドワークにおける「感受概念」の重要性は，佐藤（1992，77－82頁）の指摘を参照されたい．

（4）インタビューにおいては日付を記載しているが，フィールドノーツに関してはインフォーマントとサークルや大学が特定されないように月までしか記入していない．また名前はすべて仮名である．2000年８月まではメモ，フィールド日誌から作成したフィールドノーツであり，それ以降はテープによる録音を行っている．データは学術目的以外には使用しないという条件で了承を得ている．また紙面の関係上，インタビュー記録における筆者の発話部分を（筆者：　）と示している．（　）内に筆者とない場合は，理解を補助する上での注釈である．

（5）1998年６月から2000年３月までに調査で関わった他のメンバーには大学４年生のキヨシ，リョウタなどがおり，2000年８月以降の対象には，大学時代のバイト仲間であったマック，リョー，キハラ（すべて他大学）や，仕事を通じて知り合ったテツ，ミラらがいる．すべて名前は仮称である．

（6）またマッティのフィールドノーツにあるように，他のメンバーの使用に関しては，筆者がその使用を本人からうち明けられていない時にはあまり言及しない．ここに彼らのメンバーと非使用者である筆者の関係が示され，他のメンバーへのある種の配慮が存在している．当人が語った事柄については他のメンバーも語るが，それまでは語らないことがしばしばあった．そのため，回顧的なインタビューや他者のインタビューを行い，フィールドノーツや得られる知見の再解釈を行っている．

（7）使用の試行錯誤や他者の使用による情報の獲得といった「使用法の学習」「薬物効果を知覚する学習」「効果を楽しむ学習」等を通して，個々の使用者の使用方法を確立するまでの時期を実験的使用experimentingとして定義できる（Becker 訳書1993，59－85頁，Zinberg, N E., Jacobson, R C., and Harding, W M., 1975，P. 169）．

（8）その後は，徐々に耐性を知覚したことや新鮮さが薄れたことで使用頻度は少なくなっていき，特に2000年３月に大学を卒業した後は，機会的な使用へ至っていた．

引用及び主要参考文献

Adler, Patricia A, Adler, Peter and E Burke, Rochford, 1986, “The Politcs of Perticipation in Field Research”, *Urban Life*, Vol. 14, No. 4, pp. 363－376.

Becker, Howard S 1963, *Outsiders : Studies in the Sociology of Deviance*, The Free Press,（＝1993，村上直之訳，『アウトサイダーズ』（新装版），新泉社）.

Clifford, James and E George, Marcus 1986, *Writing Culture : the Poetics and Politics of Ethnography*, Univercity of California Press, Ltd,（＝1996　春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子訳，『文化を書く』，紀伊國屋書店）.

土井隆義　1998,「加害者としての少年，被害者としての少年－ある対教師暴力事件をめぐる記述の政治学」『犯罪社会学研究』第23号，90－110頁.

Emerson, Robert M, Fretz, Rachel I and L Linda, Shaw 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes*, The University of Chicago Press,（＝1998　佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳，『方法としてのフィールドノート』，新曜社）.

Emerson, Robert M and L Sheldon, Messinger 1977, “The Micro-Politics of Trouble”, *Social Problem*, Vol. 25, No. 2, pp. 121－134.

宝月　誠　1990,『逸脱論の研究』，恒星社厚生閣.

古賀正義　1997,「参与観察法と多声法的エスノグラフィー－学校調査の経験から」，北澤毅・古賀正義編著『＜社会＞を読み解く技法』，福村出版，72－93頁.

古賀正義　2000,『＜教えること＞のエスノグラフィー－教育困難校の構築過程』，金子書房

近藤恒夫　2000,『薬物依存を越えて』，海拓舎.

草柳千早　1994,「『問題経験』とクレイム－構築主義の社会問題研究によせて－」，関東社会学会編『年報社会学論集』，第７号，167－178頁.

草柳千早　1998,「『夫婦別姓』をめぐる言説と『現実』－反対論の方法から見る－」，山田富秋・好井裕明編，『エスノメソドロジーの想像力』，せりか書房，170－186頁.

京堂　健　1992,『マジック・マッシュルーム』，第三書館.

Maanen, John V 1988, *Tales From The Field : on Writing Ethnograpy*, University of Chicago（＝1999　森川渉訳,『フィールドワークの物語－エスノグラフィーの文章作法』，現代書館）.

中河伸俊　1999,『社会問題の社会学－構築主義の新展開』，世界思想社.

大久保圭策　1998,「最近の青少年の覚醒剤乱用問題の現状と課題」『月刊少年育成』，２月号，８－14頁.

Pollner, Melvin 1987, *Mundane reason : reality in everyday and sociological discourse*, Cambrige University Press.

Sacks, H 1979, “Hotrodder : A Revolutionary Category” in Psathas, George ed, *Everyday Language : Studies in Ethnomethodology*, Irvington Publishers, inc, pp. 23－53,（＝1987，山田富秋他訳,「ホットロッダー－革命的カテゴリー」，山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳『エスノメソドロジー』，せりか書房，19－37頁）.

酒井　朗　2000,「『逸脱』の社会学・入門」，苅谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井朗『教育の社会学－常識の問い方，見直し方』，有斐閣アルマ，54－71頁.

佐藤郁哉　1992,『フィールドワーク－書をもって街へ出よう』，新曜社.

佐藤郁哉　1999,『現代演劇のフィールドワーク』，東京大学出版会.

佐藤哲彦　2000,「ドラッグとともに生きる－薬物の「コントロール使用」に関する調査研究－」，熊本大学文学会『文学部論叢』，第68号，39－65頁.

Shaw, Clifford R 1930（Paperback edition, 1966）, *The Jack-Roller*, The University of Chicago Press,（＝1998，玉井眞理子・池田寛訳,『ジャック・ローラー』，東洋館出版社）.

総務庁青少年対策本部　1998,『青少年の薬物認識と非行に関する研究調査』.

杉浦郁子　2000,「『ライフヒストリーを記述する』実践を記述する－『レズビアン』カテゴリーの使用法をめぐって－」，好井裕明・桜井厚編『フィールドワークの経験』，133－144頁.

総務庁青少年対策本部　1998,『青少年の薬物認識と非行に関する研究調査』.

内田　良　2001,「児童虐待とスティグマ－被虐待経験後の相互作用過程に関する事例研究－」『教育社会学研究』，第68集，187－205頁.

内田　良　2002,「援助実践における『児童虐待』の定義」『教育社会学研究』第71集，89－108頁.

内山絢子・宮寺貴之　1999,「青少年の薬物乱用　１薬物使用少年の社会的背景」，科学警察研究所『科学警察研究所報告　防犯少年編』，第40巻，第１号，82－95頁.

山田哲也　2002,「不登校の親の会が有する＜教育＞の特質と機能－不登校言説の生成過程に関する一考察－」，日本教育社会学会編『教育社会学研究』，第71集，25－44頁.

近藤恒夫　2000,『薬物依存を越えて』，海拓舎.

Zinberg, N E., Jacobson, R C., and Harding, W M 1975, “Social Sanctions and Rituals as a Basis for Drug Abuse Prevention”, *American Journal of Drug and Alcohol Abuse*, 2, pp. 165－182.

付記　本稿は，文部科学省科学研究費補助金による研究成果報告の一部である.